

薬業向上加算、薬剤部長が出向先に毎月訪問

大分大病院、「行かせっ放しは良くない」

2025/9/2 12:12



取材に応じる大分大医学部付属病院の伊東薬剤部長

大分大医学部付属病院（大分県由布市）は4月から、地域の医療機関への薬剤師の出向体制などを評価する薬剤業務向上加算の算定を開始した。10年以上の勤務経験を持つ中原良介薬剤部長補佐が同県の杵築市立山香病院に出向し、来年3月まで1年間、業務に従事する。伊東弘樹薬剤部長は、毎月出向先の病院を訪問して業務内容の擦り合わせをしていると説明。「出向先で調剤だけしていた、では何の意味もない」と強調し、出向元病院には「行かせっ放し」にならないよう工夫が必要と提案する。

同加算は2024年度診療報酬改定で新設。出向する薬剤師や期間については、出向元と出向先の協議の上で決められる。一方、日本病院薬剤師会の調査によると、出向期間が「3カ月」で薬剤師が交代しているケースが最も多かった。また出向先の薬剤部長の約6割が「出向期間が短い」と回答している。

伊東氏は、「あまり短期間で人を回すと、出向先の業務を理解したらもう終了ということになりかねない」ため、出向期間を1年間に設定したと説明。また「出向先であまり役に立たない」ことがないように、ベテランの薬剤師を選んだと述べた。出向中の中原氏は薬学博士で、がん薬物療法認定薬剤師。特定機能病院である大分大病院で医療安全に専従した経験もある。

4月から出向を開始した後、伊東氏は毎月出向先を訪問している。中原氏の仕事ぶりを見るとともに、今後の方向性について出向先の病院長や薬剤科長と協議しているという。伊東氏は「出向元の薬剤部長が毎月出向先を訪問しているのは、加算を取っている他の病院ではないのではないか」とし、「薬剤部長は管理職ではあるが、現場を

見ることが大事。試行錯誤しながら取り組む姿を見ることは、地域全体の薬剤師確保・資質向上を考えていく上で参考になる」と述べた。（小泉 壮登）

All documents, images and photographs contained in this site belong to JIHO, Inc.

Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.

Copyright (C) JIHO, Inc.

株式会社じほう